

2019年1月読書会

『うめ婆行状記』 宇江佐真理 著 朝日文庫

宇江佐真理の作品にはライフワークともいえる代表作『髪結い伊三次捕り物余話』シリーズがある。平岩弓枝、北原亜以子に続く女性作家の時代小説シリーズとして期待されていた。

2015年2月号の「文芸春秋」で癌を告白。そのさなかに頼まれた新聞小説の執筆中、2015年11月に亡くなる。享年六十六。没後の2016年1月から3月まで「朝日新聞」夕刊に、未完の遺作として連載されたのが本書『うめ婆行状記』である。

主人公うめは商家の娘。望まれて江戸北町奉行所の同心の妻となる。嫁いで三十年、子供を育て上げ舅姑を彼岸へ送り最後まで家に残っていた次男を婿養子に出す。途中で急逝の夫の死を切っ掛けに、老後は独り暮らしをしたいという若い頃からの夢に向かってうめは動き出す。そして実家近くの空き仕舞屋を借りスタートする。盂蘭盆あり、祝言あり、弔いがあり、親子、夫婦、隣人、喧嘩も、許されざる恋も、病も……。うめの周りで様々の出来事が起きる。

だれの身にも起こりうる、日常のありふれた出来事ではあるが続きが気になるスリリングな展開に面白く読める。後半になると老いと死が描かれていくが、癌と闘い、死と隣り合わせの筆者の明るくユーモアある文に引き込まれる。

親子の絆、家族の温もり、地域共同体の絆、そして人にとって幸福とは何か。現代人や都市が失ったものがそっくり残っている「江戸」。江戸小説を楽しみたい。

2019年1月25日

佐藤博信 (S39 経)